

北京日本学研究中心 通 讯

(第 40 号)

责任编辑: 清水展 吴咏梅

邮政编码: 100081 Tel : 8424893 1994.9.25

新学期开始

在凉风送爽的金秋之际,北京日本学研究中心迎来了一个新的学年,也迎来了14名新到任的日本专家(自我介绍见下)、新入学的20名研究生、30名教师进修班的学员以及10名客座研究员(参见下表)。在此首先借小报向大家祝贺新学年愉快、对各位的到来表示热烈的欢迎。也祝愿大家在众多学识渊博的专家的指导下学业进步、成果累累!并希望大家在本学期对小报多加关照、踊跃投稿!

简 讯

- ◇ 9月3日:“中心”新旧专家在徐一平副主任带领下参观了“第五届北京国际图书博览会”。
- ◇ 9月5日下午:1994-1995年度北京日本学研究中心开学典礼在一层阶梯教室举行。中日双方的来宾出席了开学典礼。北京外国语大学校长王福祥、国际交流基金北京事务所长小熊旭、日本驻华使馆文化参赞桥本恕、国家教委国际合作司亚非处副处长贲永中、“中心”中日方主任严安生和竹田晃分别对新生作了热情洋溢、寄予重望的讲话。另有学生代表发言,表示要珍惜大好时光和来之不易的机会努力学习。
- ◇ 9月10日:“中心”第7任日方主任教授竹内实先生携夫人到任,主任助理浅野纯一先生也随同到京。
- ◇ 9月11日:“中心”召开了年轻教员及客座研究员会议,对“中心”今后的研究工作进行了探讨。除了原来的社会研究室、语言研究室外新成立了文化研究会。社会研究室除继续开展研究会活动外,又以藤原遥和伊藤贤次两先生为中心组成了女性问题研究会和经济问题研究会两个分支。各研究室将通过研究会、读书会等活动,对加强“中心”的研究机能发挥作用。
- ◇ 9月15日:本学期第一次公开讲座开讲。(参见公开讲座一览表)
- ◇ 9月16日18:00:“中心”在海淀鸿宾楼举行了欢送迎会,欢送在“中心”辛勤工作了一年的竹田晃主任教授和加藤晴子主任助理,同时也欢迎以竹内实新任主任教授为首的14名新到任专家。国家教委有关领导、北京外国语大学校领导、国际交流基金北京事务所的负责人及“中心”的所有教职员参加了宴会。
- ◇ 9月19日:社会研究室在2层师生活动室开展活动,由伊藤贤次先生作了题为〈战后日本的经济成长〉的报告。
8期生顺利回国。今后他们在完成论文准备答辩的同时,将担任低年级学生的入门辅导员。
- ◇ 9月20日:竹田晃先生携夫人回国,加藤晴子先生也同机回国。

离 任 之 际

竹田晃

在北京日本学研究中心的一年时间转瞬即逝了。之所以感到时间过得飞快,可能是由于这段时间的工作并非不愉快,而且也是太忙的缘故吧!

虽然专业学的是中国文学,却在中日国交封锁的时期度过了我的学生时代,因而在中国生活一年,对没有留学及长期居留经验的我来说,是一件可以实现多年夙愿的极富魅力的好事。但是,聆听了那些历任“中心”主任教授的老朋友们介绍的“中心”状况及工作内容后,我深感不安,担心自己是否真能胜任中心工作。

怀着这种既期待又不安的心情,我来到“中心”就任。在教学和运营管理这两方面,我曾多次面临

超过我预想和能力所及范围以外的难题，但是由于日中双方教职员全面周到的援助和充满暖意的理解，还不曾发生过处理不下去、让人回想起来感到不快的事情。另外与优秀的志向成为日本学研究人员众多学生们和睦相处的一幕幕，也是令人难忘的。

不管怎么说，我和历任主任教授不同，很幸运的。那就是与李德、李书成、陈海良、严安生、徐一平等五位相当出色的先生们共事，并能和他们进行私人来往。“中心”在李德前主任任期内已经结束了巩固基础、铺设轨道的时期，这次接力棒又传到了严安生主任手里，奠定了“中心”作为中国的日本学教育和研究据点的发展方向，这确实值得庆贺。

最后，衷心感谢日中双方的老师们、朋友们在这一年里给予我的深情厚谊，祝愿大家健康、幸福。以此作为我的临别致辞。

离 别 之 辞

加藤晴子

我在北京日本学研究中心一年半的任期快要到了。刚到“中心”时感到的惴惴不安和内心混乱现在已成为遥远的过去，如今我有这么一种感觉，似乎自己从更早以前就已经在这儿工作了。而且总觉得以后要一直在这儿干下去，所以至今仍不能相信再过几天就要离开这里了。倒也并非不想离开“中心”，刚刚完成一项重大任务后的轻松和满意，便是我现在的心境。

这几天我在整理这次在中国照的相片。这一年半中共照了89卷，照片多达3200张。我自己也觉得照得太多，但这一张张的照片都在讲述我在这儿生活的故事。3200张照片太沉了，但我仍要带着这些沉重的东西回国。

最后对你们给我的照顾和帮助表示衷心的感谢。

1 9 9 4 年秋学期公开讲座一览表

回 数	日 期	讲演者	题 目
第1回	9月15日	小野正弘	中国起源汉语在日语中的变化—以「元气」「天气」「风情」等为例
第2回	9月22日	奥水 优	日本人和汉语
第3回	9月29日	清水 展	菲律宾的民主化运动和「二月革命」—冷战结束的前奏曲—
第4回	10月6日	今井清一	战时下日本的日中战争论（1936—41）
第5回	10月13日	延广真治	从「余裕」看到的江户时代
第6回	10月20日	小松寿雄	日语中的男女差别
第7回	10月27日	伊藤贤次	企业的成长和衰弱—以公司寿命30年学说为中心—
第8回	11月3日	米仓 严	转折期近代诗的样式（以1926年为例）
第9回	11月10日	西垣 勤	日本的近代化和知识分子的苦恼—以森鸥外为例—
第10回	11月17日	竹内信夫	日本元仁所看到的唐末的中国
第11回	11月24日	小島泰雄	农村生活空间的日中比较
第12回	12月1日	东 茂美	源氏物语这一宇宙—女人们的意义—
第13回	12月8日	二藤尊夫	日本为什么会成功
第14回	12月22日	藤原 濶	渗入庶民的思想—模范是二宫金次郎—

到北京赴任

竹内实

推着行李一出机场大门，徐一平先生那张熟悉的脸就映入了我的眼帘，我长长地松了口气，安下心来。之所以说松了口气，还是由于在这之前很紧张的缘故吧。在飞田立史事务主任和吴怀中先生作了自我介绍后，我们便登上了胴体上写有「北京日本学研究中心」字样的通体透亮的小面己。

推开车窗，吹拂着初秋的微风，眺望着淡蓝色的天空。这才是真正的北京。这下可以欣赏360度一览无余的天空美景了。高速公路的西侧是一片整齐的树林。

四环和三环并不是初次见到，交叉路口的热闹景象在以前就很熟悉。从前我曾三、四次借宿于友谊宾馆，但住在五号楼还是头一回，而且这也是我第一次与夫人共住友谊宾馆。

头天晚上的晚饭，是由竹田晃主任教授宴请的，我们和同行的浅野纯一主任教授助理一起，战战兢兢地穿过宾馆前面的马路，来到了位于自由市场尽头的餐馆，真可谓美味寻真。大家如数家珍地给我夫人传授了许多北京生活的乐趣，听了以后，不光是夫人，我也觉得受益非浅。飞田夫妇也给我们带来了许多“小秘密”，正当谈兴盎然之际，我们结束了晚宴。

其实，竹田教授的母亲和我夫人的母亲是亲戚关系，我夫人的伯父和叔父，竹田教授是很熟悉的，因为他们曾经住在竹田教授的对门，竹田夫人和我夫人也曾共同参加过某个法事。这事一时成了话题。

竹田教授的父亲竹田复先生，在学会上经常碰到，所以大家都知道，但如果说无人知道其名字的正确读法，恐怕也不算为过吧！这次能从竹田教授处了解到其正确念法是「SAKAE」，可谓收获不小。竹田教授苦笑着补充说还有好几次被人念成「虻(MANASHI)」的。

休息了一天后的第一次去上班，还是乘坐那辆亮亮的小面己，同事们纷纷坐了上来，十几分钟就到了大学，可是正门前却由于道路施工，行车就如攀登上喜马拉雅山口般的艰难。终于突破登山口下了车，严安生先生特地前来迎接，真让人感到诚惶诚恐。

在竹田教授介绍完毕以后，我登上了讲台。想到今后一年半将同这些充满了青春清新气息的学生们一起学习，不由得感慨万分。虽说这样，却无沉浸于感慨的空闲，必须得说些什么。于是，昨天浅野纯一在共同利用室苦战了半天才完成的提纲便发挥了巨大的威力。按着提纲边讲边在黑板上写下一些词语。诸如「さわり」、「はやり」、「すたり」、「ひがみ」等。在提问「ひがみ」的汉语译文时，不知为什么，手竟没有提起来。

利用休息时间颁发了教科书，当指定的教材丝毫不差地按人数到达学生的手中时，我由衷地钦佩基金各位事务人员热心而周到的工作作风。望着这些把教科书摆在桌上的学生们的笑脸，我突然意识到已好久记不起来的感情了。大概我那时也在微笑吧。

因镶着毛泽东肖像的怀表已指向9点50分，我便宣布退课，第一天的讲课安然无恙地结束了，如果发下去的调查表回收上来的话，那就更明确地知道今天的业绩了。无论如何以后得遵照毛泽东的指示，讲好每次课。

新任专家自我介绍

浅野纯一：1958年生于冈山县。研究近现代中国文学。从京都留学到上海，后来回日本到金泽，现在又漂泊至北京。由于运动不够，所以打算打网球之类的。请一定来叫我。听说这儿“烟鬼”很少，我是其中之一，请经常教训我几句，说不定我还真的能把烟戒了呢。

伊藤贤次：1946年生于爱知县。宫崎产业大学经营系教授。专业是国际经营论。在日本担任多国籍企业论和中小企业论的课程。在企业工作的经历比较长，并在很多部门干过，还因海外事业的关系，曾在韩国和印度尼西亚长驻。爱凑热闹。热切希望在北京生活愉快。

今井清一：我是在从前以生丝而闻名的上州前桥一家丝绸世家长大的，战后一直住在横滨，故对横滨比较熟悉。我这人没长性，对什么都感兴趣，为了从红灯区探索都市的实情，曾一直驻步至大

坂。现在虽说不太能喝了，但对大街兴趣尤存。

與水 优：与汉语打交道今年已跨入第40年。现在母校东京外国语大学教授汉语语法、词汇。由于内外的要事很多，只能呆一个月，故对各位先生和学生深感不安。78-79年也是住在这个友谊宾馆，骑自行车去北大上课，故而感慨殊深，每天过得很愉快。

小島泰雄：生于1961年。长在广岛，学在京都，现在神户外国语大学工作。专业是人文地理。研究领域是中国的农村。4年前曾在中国生活，现在对社会的变化稍微觉得有点迷惑，但很想享受一下北京的生活。

小松寿雄：生于1932年。国语学，其中以江户话、东京话为中心。由于长于北海道，所以并非江户人，而自称为蝦夷人。此次是我和妻子第二次在海外生活，准备一直呆到11月底。

西垣 勤：1935年生于大坂，长在丹波。专业是日本近代文学。以有島武郎、志贺直哉、武者小路实笃、夏目漱石、为主要研究课题。这次访华是第四次。对满洲文学也开始着手。妻子在日本，单身来华。为人消极，请多关照。

二藤尊夫：出生在东京的浅草。职业是社会学者。爱好音乐。年轻时总活跃于业余乐队。十多岁时是民歌歌手、二十多岁时是摇滚歌手、三十多岁时为爵士歌手，而现在四十多岁的我只是普通的卡拉OK老哥们了。妻子是“中心”的三期生，请多关照。

延广真治：54岁。生于德岛市。现住在流山市。在工作单位是落语研究会和合气道（一种武术）部的顾问。做梦也没想到学生时代兴趣小组的活动一直缠绕了我的半生。若有京剧、说书、弹词、大道艺术可看自不必说一定要邀上我，如去旅游、吃饭的话也请千万叫我同去。想去北京的澡塘，有同行者乎？

东 茂美：生于1953年。出生在与景德镇很有缘的陶瓷故乡—伊万里。专业是日本古典文学·日中比较文学。目前正专门进行万叶集相闻歌（恋歌）和玉台新咏集的比较研究。我的名字要按中国习惯来看好象是女人名，其实是真正的九州男儿。

藤原 暹：1933年生于广岛。毕业于仙台的东北大学日本思想史专业。在冈山的一个女子大学任教后，转职到盛冈的岩手大学。对生活思想史很感兴趣，另一方面也很关心女性史·女性学的动态。明年要在北京召开国际妇女大会，所以我在想要是能对其准备工作稍微有点帮助就好了。我的名字念作「NOBOLU」。

山口敏幸：1953年生于福冈。是基金所属的日语教师。一个妻子、两个孩子。在中国任教已是第四回了。每回来都会胖，所以这次带了个监督员来。兴趣是篆刻。

米仓 严：长野县出生的三流诗人。有点担心学生们是否理解得了日本的象征诗。也在想搞一些小说、评论是不是会好些。行动范围狭小，是那种一面向书桌写稿子就有充实感的怪人。爱好古典音乐。有一男一女两个孩子。

1994年9月—1995年2月客員教授、客員研究員

客員教授	姓名	性別	出生年月	所属单位/職稱	研究題目	担任职務
	劉耀武	男	1953、4、10	黑龍江大学教授		一般事務
客 員 研 究 員	陳虹	女	1953、9、30	中国社会科学院世政研究所助理研究員	日本的金融政策和銀行規則	
	潘暢和	女	1955、10、30	吉林延边大学等語研究助理研究員	日本文化中儒学的地位	
	宋金文	男	1965、11、28	北京日本学研究中心講師	中日農村經濟組織的社会学觀點	
	劉振泉	男	1950、10、28	北京大学東方学系副教授	日本語言文化	
	李平	女	1955、1、3	人民大学工業經濟系副教授	日本產業組織政策	
	高淑娟	女	1955、10、31	河北師範學院法律系副教授	G A T T和日本国内的經濟成長	
	馬紅娟	女	1964、1、12	北京大学亞非研究所講師	現代日本女性	
	牛建科	男	1960、1、16	山東大学哲学系講師	禪和日本哲学思想	
	張秀敏	女	1961、12、12	海南大学文学院講師	女性的就職和家庭的實際情況	
	孫振波	男	1962、12、21	東北財經大學經濟研究所助理研究員	日本的經濟政策（產業政策）研究	

センター通信

(第40号)

1994.9.25

1994年-95年度・新学年開始!

涼風さわやかな秋の訪れとともに新しい学年度が始まり、北京日本学研究中心には新規着任の派遣教授14名(自己紹介欄参照)、新入生50名-大学院修士課程20名・日本語研修コース30名、さらに客員研究員10名(次表参照)をお迎えしました。まずここで小報を借りて、皆さまに新学期祝賀の意を表するとともに、センターにいらっしやったことを熱烈に歓迎致します。学識に優れている多数の専門家の指導の下で、皆さんがますます学業を向上させ、成果を大いに上げるようお祈りします。また小報にもたくさんの投稿を賜りますようお願いいたします。

< ニュース >

- ◇9月3日: 徐一平副主任の案内で、センターの新旧專家は「第5回北京図書国際博覧会」を見学した。
- ◇9月5日: 午後、1994-1995年度北京日本学研究中心入学式が、一階の階段教室において行われた。式には中日各方面からの来賓が多数ご列席くださり、王福祥・北京外国語大学学長、橋本恕・在中国日本大使館文化参事官、賈永中・国家教育委員会国際合作司アジア・アフリカ処副処長、小熊旭・日本国際交流基金北京事務所長、竹田晃・巖安生・センター中日両側主任教授から、それぞれ大きな期待を込めた祝辞が述べられた。また新入生の代表からも、大切な光陰を惜しみ、この貴重な機会を存分に生かして、学問に専念する決意が述べられた。
- ◇9月10日: 第7代主任教授の竹内実先生が夫人および浅野純一主任補佐をともなつて着任された。
- ◇9月11日: 若手研究員と客員研究員が集まり、今後の研究室活動の展開について検討した。先学期から継続の社会研究会、言語研究会のほか、新たに文化研究会を設置することを決めた。社会研究会はさらに、藤原暹・伊藤賢次両先生を中心にそれぞれ女性問題研究会と経済研究会を設置した。各研究室は今後、研究会や読書会を通じて研究活動を展開し、センターの研究機能を強化する見込みである。
- ◇9月15日: 今学期第1回目の公開講座が開かれた(本学期公開講座参照)。
- ◇9月16日: 18:00より中国側主催による歓送迎会が海淀鴻賓楼で行われた。宴会はセンターで一年間主任教授を務められた竹田晃先生と加藤晴子主任補佐を送別すると同時に、竹内実先生をはじめとする14名の新任專家の諸先生方を歓迎するためのもので、中国国家教育委員会、北京外国語大学、基金北京事務所及びセンターのスタッフ全員が参加した。
- ◇9月19日: 第一回社会研究会が2階の師生活動室で開かれ、伊藤賢次先生が「戦後日本の高度経済成長」と題する報告をされた。
: 8期生が順調な研究の成果を携えて帰国した。彼らは今後、修士論文の完成と答弁の準備をするとともに、後輩のチューターとして個人指導の任に当たる。
- ◇9月20日: 竹田晃先生と夫人および加藤晴子先生が帰国された。

離任にあたって

竹田 晃

北京日本学研究中心での1年間は、あっというまに過ぎてしまった。時のたつのが速く感じられるというのは、この間の仕事がそれほど不愉快なものではなかったということであり、また、かなり忙しかったということでもあるのだろう。

中国文学を専攻しながら、日中両国間の国交が開ざされていた時期に学生時代を過ごし、留学や長期滞在の経験をもたない私にとって「一年間中国で暮らす」ということは、積年の希望がかなえられるという大きな魅力ではあった。しかし一方で、代々センターの主任教授を勤められた私の老朋友たちからセンターの状況や仕事の内容を聞かされると、はたして自分に勤まらさうかという不安も大いにあった。

このような期待と不安を抱いてセンターに着任した私は、教育と管理運営の両面で、私の予想や能力を越えた困難な問題に何度か直面した。しかし、日中双方の教職員の周到な援助と温かい理解のおかげで、処理に行き詰まったり、ひどく不愉快な思いをさせられたことはなかった。また、日本学研究者をめざす優秀な学生諸君と親しくつきあえたことも忘れ難い思い出である。

なんといっても私が歴代の主任教授とは異なって恵まれたのは、李徳、李書成、陳海良、嚴安生、徐一平というそれぞれ大変りっぱな5人の先生方と仕事をこいっしょし、また私的なおつきあいをさせていただけただけのことである。李徳前主任のもとで基礎固めと軌道敷設の時期を終えた本センターは、このたび嚴安生主任にバトンタッチされ、中国における日本学研究所の教育と研究の拠点として発展すべく方向づけられていることは、まことに慶賀にたえない。

最後に、日中双方の老師們・朋友們的この1年間のご厚誼に心から感謝し、皆様のご健康・ご多幸を祈ってお別れのごあいさつとする。

おわかれのことば

加藤 晴子

北京日本学研究所センターでの1年半の任期がもうじき終わろうとしています。着任したばかりの頃の不安や混乱はもう遠い過去のものとなり、もっとずっと以前からセンターにいるような感じです。そしてこれからもずっとセンターで仕事をしていくような気がして、もうじきここを離れるのだという実感も湧きません。といってセンターを去りたくないかといえばそうでもなく、大きな仕事終えてほっと一息というのが今の心境です。

ここ数日写真を整理しています。この1年半の間に撮った写真はフィルムで89本、枚数にして約3200枚です。我ながら驚きあきれる多さですが、1枚1枚がわたしのここでの生活を証言しています。3200枚の写真は重たいですが、この重みを抱えて帰国しようと思います。

皆様お世話になりました。ありがとうございました。

1994年秋学期☆公開講座日程表☆

回数	日時	講演者	題目
第1回	9月15日	小野正弘	中国出自漢語の日本語における変容—「元気」「天気」「風情」などを例にして
第2回	9月22日	輿水 優	日本人と中国語
第3回	9月29日	清水 辰	フィリピン民主化運動と「二月革命」：冷戦終結へのプレリュード
第4回	10月6日	今井清一	戦時下日本の日中戦争論（1936—41）
第5回	10月13日	延広真治	“ゆとり”からみた江戸時代
第6回	10月20日	小松寿雄	日本語における男女差
第7回	10月27日	伊藤賢次	企業の成長と衰退—会社寿命30年説を中心に—
第8回	11月3日	米倉 巖	転換期の近代詩の様式（1926年の場合）
第9回	11月10日	西垣 勤	日本の近代化と知識人の苦悩—森鷗外の場合
第10回	11月17日	竹内信夫	日本円仁の見た唐末の中国
第11回	11月24日	小島泰雄	農村生活空間の日中比較
第12回	12月1日	東 茂美	源氏物語という宇宙—女君たちの意味—
第13回	12月8日	二藤尊夫	日本はなぜ成功したか
第14回	12月22日	藤原 暹	庶民にしみ込んだ思想—手本は二宮金次郎—

北京に赴任して

竹内 実

空港で荷物を押しながら出てくると、なつかしい徐一平さんの顔がみえ、ホッとしました。ホッとしたのは、やはり緊張していたからでしょう。飛田立史主任、呉懐中さんとも自己紹介をすませ、「北京日本学中心」と胴体に記したピカピカの小型バスに乗りました。

窓をあけて初秋の風に吹かれ、淡い藍色の空を眺めました。これこそ北京です。ぐるりっと360度の空の景色をたのしむこともできます。高速道路の西側は整備された林です。

四環、三環は、はじめてではなく、交差点のにぎわいも以前、みえています。友誼賓館は三、四度、宿泊したことがあるものの五号館は初めてで、家内と一緒に泊まるのも初めてです。

第一夜の夕食は、竹田晃主任教授の招宴で賓館のまえの道路を恐る恐る渡り、自由市場を通りぬけた

レストランで、同行の浅野純一主任教授補佐とともに、美味求真です。北京生活のたのしさをいろいろ家内に手ほどきして下さって、家内はもとより、私も有益な教示をうけた次第です。飛田御夫妻からも秘話をうかがい、おおいに盛りあがったところで、おひらきになりました。

じつは竹田教授のお母上と家内の母親とは親戚のつながりがあり、家内の伯父、叔父を竹田教授はよくご存知で、門と門がむきあって住まわれていたこともあり、竹田教授の奥様と家内はとある法事でご同席したこともあったのです。そのことも、ひとしきり話題になりました。

竹田教授のお父上の竹田復先生は学会でよく知られていますが、正確なよみかたは誰も知らないといっ
て過言ではないでしょう。正しくは「さかえ」であるむね、竹田教授から伺うことができたのは、収穫
でした。「まむし」とよまれたこともあったと、竹田教授は苦笑いしながら付け加えられました。

さて、一日おいて初出勤は、おなじみピカピカのバスで、つぎつぎに同僚の諸先生がのりこんでこられ、十数分で大学に到着しましたが、道路工事中の正門前はヒマラヤ登山口のようでした。登山口を突破して下車すると、わざわざ厳安生先生が出迎えて下さって恐縮しました。

竹田教授の紹介のあと教壇に立ったのですが、学生諸君は、いかにも青春の新鮮な空気にあふれ、これから一年半、これらの諸君とともに学ぶのか、という感慨がありました。とはいえ、感慨に耽っている余裕はなく、なにか喋らなくてはなりません。ここで昨日、共同利用室で浅野君が悪戦苦闘したコピーのレジュメが威力を発揮したのです。レジュメにもとづいて、それを敷衍してゆけばよく、話ながら、若干のコトバを黒板に記しました。たとえば、「さわり」「はやり」「すたり」「ひがみ」などです。「ひがみ」の中国語訳を質問したところ、手があがらなかったのは、どういうわけか。

休憩時間を利用して、教科書を配布したのですが、指定した図書が学生の数に違わずピッタリだったのには、いまさらながら、基金の皆さんの熱心、周到なお仕事ぶりのあらわれと、頭が下がりました。教科書を机上につみあげてニコニコしている学生諸君の顔は、私がここしばらく忘れていたものに気づかせてくれたのです。私もニコニコしていたことでしょう。

毛沢東の肖像入りの懐中時計が9時50分を指したので、講義終了を宣言し、第一日の授業は無事おわたのですが、「アンケート」を配布したので、それがもどってくれば、なお本日の成績がわかることになります。とにもかくにも毛沢東の指示に従って、毎回キチンと講義しなければなりません。

新任専科の一言自己紹介

浅野 順一：1958年岡山県生まれ。近現代中国文学を研究。京都、上海、金沢とながれて北京へ、運動不足なのでテニスでもしたいと思っています。お誘い下さい。今年度唯一の喫煙家とか、御指弾下さい。戒煙できるやもしれないので。

伊東 賢次：1946年愛知県生まれ。宮崎産業大学経営学部教授。国際経営論専攻。多国籍企業論と中小企業論の講義を日本では担当。企業経験（メーカー）が長く、各職場を体験し、海外事業関係では韓国、インドネシアに駐在。東アジアに興味。やじ馬的性格。楽しい北京生活を熱望。

今井 清一：昔は生糸の町で知られた上州前橋のシルク関係の家で育ち、戦後はほぼずっと横浜に住んでいるので、横浜には詳しいほうです。移り気で色々なことに手を出し、赤ちょうちんから都市のあり方を探ろうと大阪まで足を伸ばしたりしました。いまはあまりハシゴもできませんが、街には興味があります。

奥水 優：中国語と取り組んで今年が40年目。母校の東京外国語大学で現代中国語の語法語彙を教えている。内外の用務が輻輳し、1カ月しか滞在できず、諸先生や受講生に対し心苦しく感じている。ただ、78年から79年にかけてこの友誼賓館に住み、自転車で北京大学へ通ったので、感慨もひとしお、毎日が楽しい。

小島 泰雄：1961年生まれ。広島で育ち、京都で学び、いま神戸の外国語大学で働いています。専攻は人文地理学。フィールドは中国の農村。中国で暮らすのは4年ぶりです。いまはその変化に戸惑い気味ですが、北京生活をエンジョイしたいと考えています。

小林 寿雄：1932年生まれ。国語学、その中でも江戸語、東京語あたりが中心。北海道育ちなので、江戸っ子でなく、えぞっ子を称しております。妻と共に二度目の海外生活、11月一杯滞在の予定です。

西垣 勤：1935年、大阪生まれ、丹波育ち。日本近代文学が専門。主として有島武郎、志賀直哉、武者小路実篤、夏目漱石などをテーマとしてきました。中国は四度目の訪問ですが、満州文学も少し手を

着けています。妻子はいますが、単身で来ています。引っ込み思案な男ですが、よろしく。

二藤 尊夫：東京は浅草の生まれ。職業は、社会学者。趣味は音楽。若い頃は、いつもアマチュア・バンドで活躍していました。10代でフォーク・シンガー、20代でロック・シンガー、30代でジャズ・シンガー、40代の今は、ただのカラオケ・オジサンです。家内はセンターの3期生、どうぞ宜しく。

延広 真治：54才。徳島市出身。流山市在住。勤務先では、落語研究会と合気道部の顧問。学生時代のサークル活動が半生つきまとうとは夢にも思いませんでした。京劇、説書、壇詞、大道芸は勿論、旅行、食事にでもぜひお誘い下さい。北京の銭湯へ行きたいのですが、同志の方いらっしゃいませんか。

東 茂美：1953年生まれ。景德鎮に所縁ある陶磁器の里の伊万里に生まれました。専攻は日本古代文学・日中比較文学。現在は専ら万葉集相聞歌（恋歌）と玉台新詠集との比較研究をやっています。私の名前は中国風に訓めば女性の名になるそうですが、真正の九州男児です。

藤原 暹：1933年広島に生まれる。仙台の東北大学日本思想史科の卒業。岡山的女子大学で教えた後、盛岡の岩手大学に移る。生活思想史に関心を持ち、一方、女性史・女性学にも興味を抱く。来年北京で女性学の国際大会も開かれるので、少しでもその準備にお役にたてればと思っている。名前は「のぼると読む。

山口 敏行：1953年、福岡生まれ。基金所属の日本語教師。妻一人、子供二人。中国で教えるのは4回目だが、来るたびに太るので、今回は初めてお目つけ役が同行。趣味は篆刻。

米倉 巖：長野県出身の三流詩人。日本の象徴詩が学生さんに理解していただけるか、少しく懸念しています。小説・評論をやればよかったか、と想ってみたりしまして。行動の範囲は狭く、なんとなく原稿に向かっていると充実感がわくという変人のようです。趣味はクラシック音楽を聴くこと。子供は息子と娘各一人。

1994年9月～1995年2月 客員教授

氏名	性別	生年月日	所属先/職名	担当科目
劉 耀武	男	1925. 4. 10	黒竜江大学教授	一般言語学

1994年9月～1995年4月 客員研究員一覧

氏名	性別	生年月日	所属先/職名	研究テーマ
陳 虹	女	1953. 9. 30	中国社会科学院世紀政治研究所助理研究員(講師相当)	日本の金融政策と銀行規制
潘 錫和	女	1955. 10. 13	吉林延辺大学朝鮮研究所助理研究員(講師相当)	日本文化における儒学の地位
宋 金文	男	1965. 11. 28	北京日本学研究中心講師	中日農村経済組織の社会学視点
劉 振泉	男	1950. 10. 28	北京大学東方学系副教授	日本言語文化
李 平	女	1955. 1. 3	人民大学工業経済系副教授	日本産業組織政策
高 淑娟	女	1955. 10. 31	河北師範学院法律経済系副教授	G A T T と日本国内の経済成長
馬 紅娟	女	1964. 1. 12	北京大学アジア・アフリカ研究所講師	現代日本女性
牛 建科	男	1960. 1. 16	山東大学哲学系講師	禅と日本哲学思想
張 秀敏	女	1961. 12. 12	海南大学文学院講師	女性の就職と家族の在り方について
孫 振波	男	1962. 12. 21	東北財経大学経済研究所助理研究員(講師相当)	日本の経済政策(産業政策)の研究